小さな幼稚園

菊池百合

「全部の子どもの名前をやっと覚えたの！」授業を受けていた時、常に積極的態度を示していたKさんが、幼稚園の先生になり、はじめにしたこととして、はずんだ声で報告してくれた言葉でした。彼女の勤めた幼稚園は、東京近郊の大団地のそばの、いわゆるマンモス幼稚園です。自分の組の子どもなどという狭い考えでなく、全園児の名前を覚え、顔と一致させたというのです。「私は先生一年生で、他の先生たちのように上手な保育はできないから、せめて自分にできることをしただけ」とこともなげに語りました。きっとよい保育をしているのだろうと想像し、彼女の努力に頭が下がりました。子どもと先生の結びつきはこんな所からはじまり、おそらく、子ども同志のつながりも深まることでしょう。

昨年四月、四歳の娘を近くの幼稚園に入園させ、母親の立場で幼稚園にふれ、今迄以上に人と人とのつながりの重要さを感じています。入園願書を提出した頃には、近所で最も小さな幼稚園でしたが、驚いたことに入園迄の間に立派な二階建園舎が増築されていました。園庭は狭くなり、陽あたりは悪くなり、それにも増して園児数の急激増加により、ひとりひとりの子どもを受容する心まで消え去ろうとしてはいまいか不安になりました。

以前ニュージーランドで訪ねた幼稚園は、どこでも定員たった四十名のこじんまりしたもので、そこに教師、助手、母親の手伝い係が各一名いて保育にあたっていました。保育室や園庭は広々として、日本ならば百名近くもつめこみそうなのびやかなものでした。希望者が多い時には、もうひとつ新しい幼稚園がつくられるという羨しいものです。

子どもの名前すらわからない程園児数が増え、クラス数が増えると、とかく子どもは無視されて、どの組も同じことを同じようにさせようという保育者の考えが強くなるようです。

子どもたちは、自分を知らない、自分もあまり知らない他の組の先生と、型通りの挨拶をしてスクールバスにつめこまれ、一日がはじまります。朝の先生との出会いは、その日一日安定

した時をすごす大切な鍵だと思うと、心ある出会いがほしいと感じながら娘を見送ります。

幼稚園には友だちが沢山いて、思う存分遊べることを楽しみにしていた娘は、「今日もお椅子にすわっていただけだったよ」と、幼稚園観を修正したようでした。先生の指示に従い、みんなが同じように行動する従順と忍耐の訓練場になったのです。入園前のすごし方に問題があって悲しいかな主体性のとぼしい娘は、すんなりとその型にはまり、先生を困らせることなく、小さく小さくまとまりはじめました。折紙をし、見本通りの絵を描き、教えられた歌や遊戯をくりかえし、次の課題が与えられるのを待っています。

待ってほしいのは、すごいスピードで走り続ける先生の側ではないでしょうか。のびのびと安定した環境で、自分の興味あることを、友だちとのふれあいの中で、たっぷり時間をかけて、ある時はぼんやり、ある時は試行錯誤しつつ考えながら、満足のゆくまで熱中して遊ぶには、先生の指示、命令、禁止や制限の連発よりも、あたたかい見守りがほしいのです。柔軟性のあるゆとりある保育の中でこそ、幼稚園でなければ経験しえない子どもと子どもの躍動的な世界が展開できるのだと思うのです。

半年前から、二歳児八名が週一回一時間半程団地の集会所で遊びはじめました。母親から離れて、同年齢の友だち集団ですごす時をつくりました。包装紙をベタベタはりつけたダンボール箱の車をおし、机のトンネルをくぐり、お互いに信号の合図をしては、列をつくって止まったり走ったりしています。保育者が信号のつもりで準備したダンボール片は、空箱の太鼓の撥になったり、粘土のお弁当を作るためのナイフになったり、予想もできない活用をしてくれます。子どもの想像力のたくましさに感動させられ、子ども同志のかもし出す子どもらしい世界ののびやかさに驚かされています。

子どもの持つ無限の可能性を、大人の狭いかたい考えで、小さな型にはめこむことなく、子どもをじっくりみつめ、子どもの心にふれ、すくすくと成長させることを援助できる、きめこまやかな心ある幼稚園、子どもたちが自分の意志でたくましく活動にとり組め、友だちと先生の輪の中で充実感をつみ重ねられるような幼稚園が、もっともっとほしいとしみじみ感じている最近です。これは同時に、幼稚園に期待するだけでなく、可能な範囲で母親が実行しなければならない課題でもあると思います。私も小さな幼稚園とまではゆかずとも、幼稚園のまねごとに積極的に取り組もうとしています。